

抗 議 声 明

平成16年10月1日

加茂市長 小池清彦

一方的な県立加茂病院の産科の廃止に向けた休診に対する嚴重抗議について

県立加茂病院の産科は、加茂・田上地域に存在する唯一の産科病院として、この地域の住民の安全と安心と幸福のために無くてはならない存在であり、県立加茂病院の中で最も重要な診療科である。

去る平成11年10月妥結した県知事と加茂市長の加茂病院に関する交渉においても、最も重要な問題となったのが産婦人科の存続と病床の数であった。

この交渉が妥結した時私は、県当局に対し、今後の加茂病院の運営については、地元住民の意向を尊重し、加茂市長と十分協議を行うよう要請し、県当局も異論はとなえられなかったと承知しているところである。

しかるに、県は、地元住民の意向を何ら尊重せず、加茂市長に何の協議もなく、一方的に10月1日を以って産科を休診することとした。再開のめどは立っておらず、廃止に向けての措置であることは明らかである。

私は、この県の決定を9月14日偶然知り、直ちに平山知事と高橋副知事に嚴重に抗議し、産科の診療を続けられるよう要請した。

高橋副知事は新潟大学医学部の産婦人科の教授のところに出向かれ、協力を要請されたが、産婦人科教授は、県立病院全体に配置されている医師のや

りくりで対処されたいと伝え、県は休診を実行することとしたとのことである。

加茂病院の産科を休診する理由についての県当局の説明は、二転三転して甚だ不明瞭である。

5人の医師をがんセンターに配置して、そのうち3人が加茂病院の産科に交代で勤務していたのを、新潟大学医学部産婦人科ががんセンターでの1人の医師の配置を拒み4人配置となったためと述べたかと思えば、今度は医師2人体制が取れない産科は廃止すると新潟大学医学部産婦人科が言っていると述べる。しかし、この医師不足の時に多くの産科病院は医師1人体制であり、そんなことは理由にならないと当方が反論すると、それを撤回して、最後には加茂病院産科は来る妊婦が少ないからだと述べるに至っている。

しかし、加茂病院産科は、立派な医師と12人の助産師がいるという極めてすばらしい体制にあるにもかかわらず、最近ここで出産をする人が比較的少なくなっている理由は、ただ一つである。それは、加茂市とその周辺地域一帯で、病室が個室でないのは、加茂病院産科ただ一つであるという事実のためにはほかならない。他の病院は、ほとんど医師1人体制であって、緊急対応は加茂病院が最も優れているにもかかわらず、妊婦は、病室が個室である他の病院へとおもむくのである。

即ち、加茂病院産科で出産をする人が減っていることの責任は、加茂病院自身にある。病床が余っているにもかかわらず、あえて個室化をしない加茂病院自身に責任がある。

そこで、「まず、個室化を実行して、患者数を増やすのが先ではないか」との私の主張に対し、加茂病院首脳の1人は「個室化をして妊婦が沢山加茂病院にやって来ると対応が大変だから困る」という趣旨の発言を行った。これ

は、日頃の怠慢を正当化し、努力することを拒否する許し難い暴言である。

即ち県は、自らの怠慢と無責任によって、来院妊婦の減少を招いておきながら、それを理由として加茂病院産科を休診したのである。県は、はじめから加茂病院産科を廃止することを目的として、あえて、個室化をしないことによって来院者を減少させ、それを理由として、産科を休診するという暴挙を断行したといわれても仕方がないであろう。

現在加茂病院以外の県立病院で産科があるのは、坂町病院、新発田病院、がんセンター、吉田病院、小出病院、六日町病院、十日町病院、上越中央病院であり、8つもの多数にのぼっている。産科が置かれていないのは、性格の違う瀬波病院を除けば、津川病院、柿崎病院、松代病院、妙高病院の4つにすぎない。このうち、津川病院と柿崎病院の2つは、平成12年に平山知事によって廃止又は休診となったものである。

これだけ多くの県立病院に産科があり、新潟大学医学部産婦人科がこれをバックアップする体制がとられているときに、たまたまがんセンターに配置された医師が5人から4人になったからといって、加茂病院産科を休診するという暴挙に出なければならないという事態ではない。新潟大学も一緒になっての工夫と医師のやりくりで、対処できるはずである。

平山知事がもし、このたびも4選をめざして知事選に立候補されていたとしたら、このたびの暴挙をあえて強行されたであろうか。加茂病院の産科を休診するようなことは、絶対になさらなかったはずである。

私は、平山知事が加茂市民のために一生懸命頑張るとの公約を完全に破棄され、加茂病院産科の個室化の努力を全くせず、さらに、こともあろうに退職されるにあたって、加茂市長に何の協議もないまま、加茂市民と田上町民にとって最も大切な加茂病院産科を休診するという暴挙を敢行されたことに

強く抗議するとともに、直ちに産科の診療を再開されるよう断固として要請するものである。

また、病室が余っているにもかかわらず加茂病院の産科の個室化の努力を怠り、今後個室化する意思もなく、来院者の減少を招き、あまつさえ、それを理由として、加茂市長に何の協議もなく、一方的に加茂病院産科を休診させた山田武直病院局長は、責任をとるべきであり、同局長の即時更迭を強く求めるものである。

さらに新潟大学医学部産婦人科教授におかれては、加茂病院に産科がなくなることが、どれだけ加茂・田上地域の住民の安全と安心と幸福を大きく損なうものであるかに思いを致され、最大限の工夫をなさって下さり、直ちに加茂病院の産科の診療が再開されるよう、格段の御盡力をお願いするものである。

加茂病院は、小児科が不十分で10月1日からは、さらに外来の診療が週2日午前中だけに縮小され、泌尿器科と耳鼻咽喉科の体制も不十分である。人気の整形外科が休診になるかもしれないという話も聞く。脳外科の医師はいなくなり、全体として誠に寒心に耐えない状況にある。

それでも私は、知事と病院局を信頼して、忍び難きを忍んで来たところである。しかし、このたびの暴挙は絶対に見過ごすことはできない。加茂病院全体的大幅な充実を強く求めるとともに、重ねて加茂病院産科の即時診療再開を強く要請し、加茂市民及び田上町民の皆様と共に断固として闘うことを誓うものである。